



羅針盤

2015年度 第17号
都立豊多摩高等学校
進路図書部

Geistesaristokrat

2016 (平成28) 年1月28日発行

今年のセンター試験が終わった(1月16・17日)。3年生は、18日(月)、雪の中を登校し、「自己採点」を行った。正解を確認しながら自分の得点を記入して提出。算出ずみの学友も、結果を報告した。

満点の星 —センターの中間発表と自己採点—

データは、「ベネッセ・駿台」と「河合塾」に送り、偏差値や合格確率など、受験者中の自分の位置が分かる資料にしてもらおう。これをもとに3年生は、受験の最終的な作戦スケジュールを練る。

大学入試センターからは、中間集計結果が発表された。最終集計結果の数値は、これより多少下がることが多いようである。下記の表は、それに校内の平均と最高点を合わせたものである。豊多摩生は健闘している。努力が前提だけれど、たどり着ける^{いただき}頂は高いのである。

特記すべきは、満点の人数。古文43人、漢文6人、現代文2人、世界史B・日本史B・地学基礎・リスニング各1人。最高点を辿っていけば、難関国立をねらう数字になる。確かに同一人の成果ではない。が、難関国立をねらえる環境がそこにあるということである。君も先輩に続こう。

教科名 (配点)	科目名	全国 受験者数	全国 平均点	全国 最高点	豊多摩 受験者数	豊多摩 平均点	豊多摩 最高点	
国語 (200点)	国語合計(200点)	222,768	125.90	200	100	146.5	186	
	現代文(100点)	発表なし			215	76.4	100	
	古文 (50点)	発表なし			165	40.6	50	
	漢文 (50点)	発表なし			100	29.5	50	
地理歴史 (100点)	世界史B	39,745	68.86	100	46	77.5	100	
	日本史B	70,764	66.59	100	86	72.7	100	
	地理B	46,759	61.74	100	19	62.0	86	
公民 (100点)	現代社会	29,833	55.84	100	3	61.7	74	
	倫理	9,739	51.56	94	4	55.0	73	
	政治・経済	19,990	61.81	100	26	68.8	94	
	倫理、政治・経済	21,011	60.96	100	3	51.0	66	
数 学	数学①(100点)	155,171	56.66	100	92	55.6	82	
	数学②(100点)	139,494	50.18	100	79	47.8	88	
理 科	理科① (50点)	物理基礎	8,095	35.05	50	7	33.3	46
		化学基礎	37,004	27.56	50	14	30.6	46
		生物基礎	42,734	28.32	50	14	35.0	45
		地学基礎	14,325	35.65	50	3	41.0	50
	理科② (100点)	物理	65,297	62.32	100	28	59.4	96
		化学	84,447	55.73	100	39	53.5	86
		生物	30,941	64.23	100	28	67.1	88
		地学	886	40.57	100	2	50.0	50
外 国 語	筆記(200点)	233,457	114.67	200	237	125.9	192	
	リスニング(50点)	227,755	31.28	50	231	33.3	50	

※ 「国語」の「豊多摩平均点」は、現代文・古文・漢文の平均点を足したものである。

やりたいことが見つからない —カーニヴァル化する社会で—

1月9日（土）の「SWITCHインタビュー」（NHK-Eテレ）は、医師の日野原重明^{しげあき}（104）と美術家の篠田桃紅^{とうこう}（103）。内容は、さすが合わせて207歳、天衣無縫融通無碍^{てんいむほうゆうずうむげ}の要約不能であった。問題は、若者の悩みに答えるコーナー。放送局の用意した20～30代の悩みが「やりたいことが見つからない」だったのである。

社会学者鈴木謙介の『カーニヴァル化する社会』（講談社現代新書、2005）を思い出す。

ニート^{かじゆう}や過重労働、監視社会、ケータイ依存という問題を題材にして、現代社会を論じている。過度の情報発達によって、私たちは、振り回され、酔ったり、熱狂したりする。そんな情報の狂乱が日常化している社会（＝カーニヴァル化する社会）では、自我の構造が不安定化する。そこに、若者の生きにくさが生じる。ニート（就職も進学もその準備活動もしていない人）の問題を、私たちは「甘え」の視点から考えがちだけれど、「甘え」は本質的な原因ではない。カーニヴァル化した社会では、普遍的な価値基準を維持できないのである。経済不況は雇用環境に影響し、職業選択の幅が狭くなり、終身雇用も期待できなくなる。適格的な就職先は、ほとんど存在しない。10年前の著作だが、状況は改善されていないといえよう。

彼ら（フリーター）の語る「やりたいこと」は非常に漠然としており、多くの場合それはまだ見つかっていないものなのである。（中略）

やりたいことはよくわからないが、とにかくやりたいことに向かえば良い、というのは端的に自己展開している論理であり、こうした論理にこだわる限り、「やりたいこと」はいつまでたっても見つからない。「やりたいことがある」からがんばるのではなく、「やりたいことを見つける」ために頑張る以上、本当のところ、それが「本当に」やりたかったことなのかどうかは、本人にさえ決められないのだ。結果的に彼らは、いつも「暫定的にやりたいこと」へ向けて「やりたいこと探し」を続けていくことになる。

（同書39～40頁）

この現代社会では、やりたいことは見つからないというのである。暗澹^{あんたん}としてくる。

が、鈴木謙介は別のところで、アンソニー・ギデンズやウルリッヒ・ベックという社会学者が提唱している処方箋^{しよほうせん}を紹介している。

ギデンズやベックの考える処方箋は、以下のようなものだ。すなわち自我が分裂し、自分でも何故そのようにするのか分からないアンコントロールな状態が現出するのは、近代社会がもともと持っていた（と思われていた）目標や理念が喪失し、それにもかかわらずそうした「目指すべきもの」がどこかに存在するかのようには振る舞ってしまうことで、それらへの嗜癖^{しへき}（中毒）が生じてしまうからだ。故に我々は、どこか遠いところにあると信じている「目指すべきもの」が、実際は自分の内にしか存在し得ないことを自覚し、その上で「あえて」そうした目標や理念を選び直さなければならない——。

こうした処方箋は、自我の分断がもたらす社会的帰結をできる限りポジティブに評価し、何らかの社会的施策^{しきやく}（とその方針）を打ち出そうと考える限りにおいて、妥当なものだと言えなくもない。しかしながら、それはどのようにして可能になるのか、と問うたとき、あらゆる人がそうした反省的な自我を得ることは困難であり、それどころか「あえて選ぶ」冷静さと、唐突に生じるアンコントロールな熱狂との分断をこそ加速しかねないのではないかと思うのだ。

鈴木謙介「社会論の前に自我論が必要である理由」（「本～読書人の雑誌～」05年6月号）28頁

鈴木は懐疑的だが、ギデンズやベックの意見に説得力を感じないだろうか。ほかに方策がない以上、検討する価値があるのではないか。反省的に自分を見つめ、第一の目指すべきものをあえて選び、一意専心突き進め…。氾濫する情報の中で自分を見失わないための防御策として、有効なのではないか。

そうであるとして、この「狂乱」の社会で、冷静と情熱を保持しつつ、自分の内にしか存在しない第一の目標をあえて選ぶためには、どうすればいいのだろうか。以下次号。